

たいへん遅くなりましたが、

**あけましておめでとうございます。
今年もなにとぞよろしくお祈りします。**

2017年酉年がスタートしました。まさに浦里小学校にとってもますます羽ばたく年になってほしいです。

卒業式まで2ヶ月を切り、いよいよ5年生が主役となってこの学校をきりもりしていく時期になってきました。

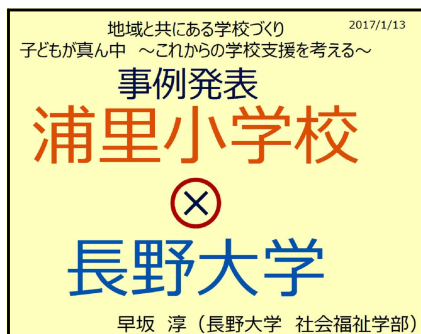
ここで一つ、お知らせすることがあります。3学期から、5年生の担任が変わりました。

もともと本校にお勤め頂いていた竜田真紀子先生が、5年生の担任として本校に戻ってきて下さいました。現在の6年生を1年生の時から担任した先生であり、あのいまわしい火事を共に乗り越え、学校を再興して下さいました先生でもあります。なにとぞよろしくお祈りします。



上田市で浦里小の取り組みが発表されました

1月13日上田市の「地域と共にある学校作りシンポジウム」で、長野大学 早坂淳先生が浦里小学校と長野大学の連携について紹介して下さいました。



左は最初に提示されたスライドです。「長野大学+浦里小」ではなく「×」となっているのはなぜか。それだけ多くの成果や可能性が浦里小にも長野大学にもあるということです。

話の中で、早坂先生は浦里小学校の歴史に始まり、本校の紹介をして下さり、そのあとこまゆみ教室に関わる取り組みと、学生達の成長を語って下さいました。(今まで学校だよりで紹介してきたのでそこはカットします)そして、学校支援とは学校地域協働活動であること、様

々な人たちが様々な立場で様々な関わりあいをしていくことが必要であること。多様な他者との関わりがこれから生きる子どもたちにとっても大人にとってもいかに大切であるかということ等をわかりやすく教えて下さいました。

次に提示するスライドは、当日早坂先生が時間の都合で提示できなかったものです。しかし、それを見るとなぜ今の協働が必要かが見えてきます。

活動の成果
子どもたちの変化
学生たちの変化
私の変化

学校支援
(地域学校協働活動)

教育 =
地域 + 学校

多様性
創造性
相互尊重

これからの子ども 社会の変化に 主体的に向き合える 主体	これからの子ども 多様な他者と 協働して新しい価値 を生み出す主体	今までの学校 答えや解き方が 定まった問題を 効率的に解く練習	これからの学校 答えの無い問題に 向き合わせる	今までの学校 既存の文化を 伝達・再生産 する場	これからの学校 新しい価値を 創造する場に
--	---	---	--------------------------------------	--	------------------------------------

早坂先生の実践発表の後、現つくば市教育長 門脇 厚司 さんの講演会がありました。そこで驚いたのは、「子どもの本当の友だちは大人である」という言葉です。子どもは産まれた時に大人と関わるために必要な力を備えている。赤ちゃんは大人を探し、正しい言葉であれば耳を澄ます。アイコンタクトを通して、他と関わりを意識し、それが関わり合う意欲を育てる。子ども同士で関わる事も大切だが、子どもたちはさまざまな大人と関わる事で社会力を身につけてくる。

これから生きる中で真に必要なのは「社会力」であるということです。

門脇先生が言われる社会力のある人間とは、次の通りです。

- ① 人間が大好きな人間
- ② どんな人ともうまくコミュニケーションできる人間
- ③ 他の人といい関係がつけれる人間
- ④ 他の人と協力しながら物事を成し遂げることができる人間
- ⑤ 他を人の身になり、立場に立って物事を考えられる人間
- ⑥ 他の人を思いやれる人間
- ⑦ 物事に対して常に前向きに取り組もうとする人間
- ⑧ 何事にも創意工夫を怠らぬ創造的な人間
- ⑨ 自分も社会の一員であるという自覚がある人間
- ⑩ 社会の運営に積極的に関わろうとする構えができている人間
- ⑪ 自分の能力を活かし、家庭や地域や職場で自分の役割を果たせる人間
- ⑫ 社会の改善や改革にも積極的に関わろうとする意欲のある人間
- ⑬ 広い視野から社会の情勢や動向を判断できる人間
- ⑭ 自分の行動が他の人や社会の動向にどう影響するかを考えながら行動できる人間
- ⑮ 人類社会の将来に常に思いを馳せながら行動できる人間

こういう人間が育つためには、大人との関わりが必要。それも少数でなく、様々な年代の様々な価値観を持った大人との関わりなのだそうです。となると、地域・保護者の皆様のご支援をたくさんいただける本校は非常に子育てには適した学校であるということです。

そして、1月20日、ついに長野大学の学生、翠川昂佑さんによる第1回の授業が実現しました。「みんなでカラフル絵の具ランド」というテーマで、グループ毎に1枚ずつ作品を作りました。子どもたちは見事に関わりあい、協力し合って、また、友だちの良さにも気付きながら作品を生み出しました。今、図画工作では、「鑑賞」の大切さが叫ばれながら、なかなか子どもたちは友だちの作品の良さに気付くことができません。それが、グループで創作を行うことで、自然と友だちが書いたところを鑑賞し、その良さをつぶやいたり、自分の描画に取り入れていったのです。まさに、本職である私たちが勉強をさせて頂いた2時間でした。



<新指導要領 英語の教科化について考える>

初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるということで、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実が図られます。

小学校では、5、6年生の英語が現在週1コマ（1コマは45分）ずつ行われている「外国語活動」（英語教員隊の皆様にご支援を受けて行っています）が教科になり、年間の授業時数は70コマ分に倍増します。他教科も合わせると総時数は1015コマ分。現在のコマ数（年間980コマ）を超える量です。小学3、4年で年間35コマ（週1コマ）分の外国語活動が始まります。ところが、ほかの教科は時数が変わらないため、小学3～6年生の授業時間も「純増」するわけです。これをどう生み出すか、頭を悩めています。

簡単に言うと現在6年生は1週間で29コマ（水曜日5時間、それ以外は6時間）で学習をしています。そこに1コマ分をプラスすると、水曜日も6時間にしなければならなくなります。なんだそれだけのことかと思われるかも知れませんが、実は、水曜日の6時間目から放課後にかけて、職員会や職員研修会を持ち、児童の様子、授業や学校のあり方、行事等の計画や反省等、様々なことを話し合い、学び会って、充実した学校運営、様々な教育課題の情報共有や解決、授業力向上や資質向上等に使っています。もちろん他の曜日の放課後も毎回の会合や連学年の打ち合わせ、授業準備に使っていますので、単純に振り分けることができません。

もちろん、長野県は他の県に比べて登校日数を多くし、本校で言うと年間1173コマをとれるようにしています。1173-980=193ですので、その余った時間に行うということもできます。しかし、その時間は、児童会やクラブ、行事やその準備、国語や算数等他の教科の補充、授業研究そして、本校で大切にしている総合的な学習等体験学習等にあてており、満タン状態です。

あともう一つの方法は、モジュールと言って、例えば1日に10分ずつ行う方法です。そうすると、週50分とれます。しかし、本校では、その時間を読書、体育や音楽集会、体みがき、励みタイム（算数や国語のドリル）等にあて、それも子どもたちに確実に力をつけています。

つまり、英語を実施するためには何かを削らなければならなくなるわけです。その他にも、いろいろな問題があります。その一つは、誰が英語を教えるかです。当然教科になれば、学校の教員が教えていくことになります。各校一人ずつ英語の専門の先生をつけてくれればいいのですが、それは叶いそうもありません。結局、英語の免許を持っていない担任が行うしかありません。研修会を開いてくても、そのために学校をあげなければならなくなります。これを考えて行くと頭が痛くなります。

平成32年から完全実施。その前の30年度から2年間移行措置期間として初めて行くこととなります。

また、よいお考えがあったらお聞かせ下さい。

